様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　22 年　6 月　14 日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2008～2010
課題番号：20700505
研究課題名（和文）　エジプト民族スポーツ“ナッブート”のエスノグラフィー
研究課題名（英文）　Ethnography on Egyptian ethnic sport “Nabbut”

研究代表者
瀬戸　邦弘（KUNIHIRO　SETO）
サイバー大学 ・ 国際文化学部 ・助教
研究者番号：40434344

研究成果の概要（ 和文）： エジプト・ アラブ共和国上エジプト 地方における伝統的民族スポーツである“ ナッブート ” に焦点を当て、特に祭礼にて実施される競技会を通して、社会におけるこのスポーツの役割、機能について考察を行った。研究の結果、この競技が当該地域のコミュニティ内および、コミュニティ間の人間関係の再生産に際して大きな期待と役割が付与され、また、それは当該地域のエスノサイエンスとしての独特な身体観とそれに伴う身体技法を育み、ひとつの身体文化として存在していることが確認された。

研究成果の概要（ 英文）： The purposes of this research are the present condition of the traditional and ethnic sport performed in the festival of Upper Egypt society, and consideration about the role expected there. I want to let the situation that the athletic meet of *al-nabbut* is held pass, and to clarify the function as a festival of a saint birth festival, and the role to the society, which this game achieves. As a result of consideration, *al-nabbut* functions as what is tied up of the local resident of the area concerned, and is considered to have contributed to group maintenance. It makes the original technique accompanying the unique body view and unique it as a concept of ethno-science of the area concerned, and exists as unique body culture.

交付決定額

（ 金額単位： 円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：　スポーツ人類学 スポーツ哲学　健康・ スポーツ科学
科研費の分科・ 細目：　健康・ スポーツ科学　スポーツ文化人類学
キーワード ： スポーツ人類学　スポーツ科学　文化人類学　エスノサイエンス　エジプト　地域研究

１．研究開始当初の背景

現在に至るまでイスラーム地域の社会・ 文化研究が行われる場合、その中心は文献資料の考察・ 分析であった。なぜなら、イスラー

ム研究の焦眉の課題は、宗教的聖職者による神学・教学書や説教録など正統的教義の世界であり、つまり、教理研究にその主眼が置かれたものだったからである。したがって、その一方で文字化されていない口頭伝承などを含む、一般民衆の日常的実践に関しては、研究者の中心的な興味関心からは外れ、その蓄積が不足している事は否めなかった。そこで本研究では“民衆文化”としてのスポーツに注目し、特にナッブートと呼ばれる格闘技を通して、文化装置としてのスポーツが、当該社会・文化における日常的実践とその世界観を如何に支え、機能しているのかを考察するものである。すでに申請者は本課題を継続的に進めているが、後述するように本競技の参与観察を行う地域では集団移住政策が実施されるタイミングに当たり、研究課題の更なる詳細研究はもちろんのこと、移住というコミュニティにとって大きな節目に当たり、スポーツ文化が如何に変容するのかをつぶさに観察し、動態としての文化を理解する必要があると考える。尚、ナッブートをスポーツ文化と捉え、また文化装置として論じるのは研究史上、本研究が初めてのこととなろう。

２．研究の目的

先に述べたが本研究ではスポーツ文化が当該地域社会で如何なる役割、機能を果たし得るのかを考察することがその目的となる。以下に詳述するが、ナッブートと呼ばれるスポーツが、それを実践する上エジプト地方農村部の人々の「上エジプト人」としての地域アイデンティティを創出し、また周辺地域コミュニティ間のネットワークの構築、強化にいかなる役割を期待され、また機能を果たしているのかを、聖者信仰、特に聖者祭との関係性に注目しながら考察することになる。

また、これらの機能を可能にするこの競技を通して護られ、育まれる身体観や身体技法、そして暗黙知として共有される身体文化を詳らかにし、身体・スポーツ文化について新たな知見を提供することがその大きな目的となる。

周知のようにエジプト・アラブ共和国はムスリムが大半を占める国であり、本考察の対象となる事象もムスリム達の生活の中におけるスポーツ文化である。ナッブートとはアラビア語で「杖」を指す言葉であり、平素は杖として利用するナッブートを用いて、上エジプト地方の人々は祝祭の折に武術の競技会を催す。

伝統文化として行われるスポーツには実修者達にのみ共有される“約束事”が明文化されないまま保持・共有される事が多く、この競技もその例外ではない。したがって、本研究を遂行するに際して実修者の共有する明文化や言語化さえされずに育まれた身体世界を研究する事は重要な視座と言えるだろう。つまり、本研究課題は西欧の世界で育まれた近代的な身体観とは異なるイスラーム世界の「身体への眼差し」を考察し、我々が従来理解する西欧的身体理解と比較検討され、スポーツ科学の知見に新たな「身体観」のあり方を提示する事にもなるのである。ところで、本研究が実施される調査地を含むルクソール西岸地域は、古代エジプト時代に首都テーベが置かれた場所でありツタンカーメンの墓で有名な王家の谷や貴族の墓などや、ハトシェプスト女王葬祭殿などが点在する遺跡群の中に位置する。これらの遺跡群は1979年にその価値が広く認められUNESCOの定める世界遺産に登録された場所であり、(遺産名: 古代都市テーベとその墓地遺跡）観光地としての性格も有するところとなる。

３．研究の方法

研究実施期間には本競技実修地域であるエジプト・アラブ共和国上エジプト地方にお

いて丹念な参与観察を行い、あわせて英国の王立人類学研究所付属図書館における関連文献収集、ならびに日本国内におけるデータの分析・考察を本研究の3つの軸と位置づけて展開した。

現地での参与観察はインフォーマントへの聞き取り調査、およびビデオ、カメラによる競技会、練習などの映像・画像の記録を通して行われた。調査は上エジプト地方のルクソール市ナイル川西岸を中心とした地域で行われ、特に同地域で行われる祝祭のひとつ聖者祭において実施される競技会とそれを取り巻く状況を中心に参与観察が行われた。毎夏に行われる参与観察を受けて日本国内でのデータ整理を行い、その後毎春英国を訪れ参与観察で得られた知見を基として、文献収集を行った。

4．研究成果

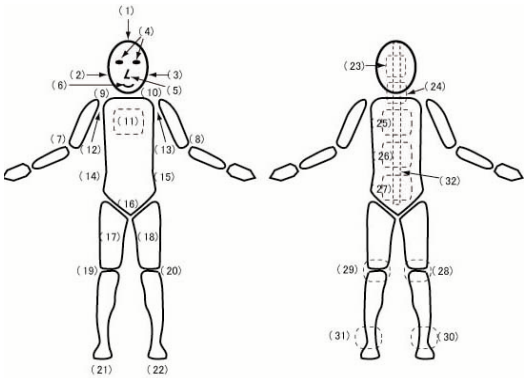
本研究においてはこのナッブートの競技を通して育まれ、また共有されるいわゆる“エスノサイエンス”としての身体観、身体技法のさらなる抽出が行われ、それらを通して当該地域の人々に認識される身体・文化・社会の一層の理解がなされることとなった。

ナッブート実修者達はこの競技を「上エジプト」という地域特有の身体・伝統文化として強く意識・保持し、伝統的な競技会や競技スタイルを堅持している。したがって、彼らにとってこの競技会は単なるスポーツイベントではない。彼らにとり重要な「地域」アイデンティティの形成の場であり、いわゆる“上エジプト人”を構築する場（システム）として機能していることが確認・理解された。

ところで、本来ナッブートはいわば土着の地域文化の一つであり、宗教的な文脈には位置しないものである。ところが、実修者達はこの土着の文化を聖者祭という宗教的文脈に乗せることによって、「聖者への奉納」という宗教的付加価値を得ることになり、一方で暴力的であり、前近代的な旧習として否定される場合もあるこの競技に社会的正当性を付与する事に成功したことが判明した。

宗教的実践の中での正当な位置を手に入れたナッブートは、その地位を不動のものとしつつも、その一方で元来の宗教文脈と関係ない「スポーツ・競技」という地域の人々の直接的な出会い、対面の場としても機能し続けているために、直接的人間関係再生産の場として大いに機能し続けているのである。

ナッブートが齎す人間関係構築の場には、共有される身体観に基づくさまざまな所作とそれにより再生産される価値観が存在する。この実修者たちに共有される約束事やハビトゥス（社会的に習慣化された身体技法）は、西洋医学にみる解剖図とは違ったいわばエスノサイエンスとしての身体観であり、独特のイメージ化が図られている。

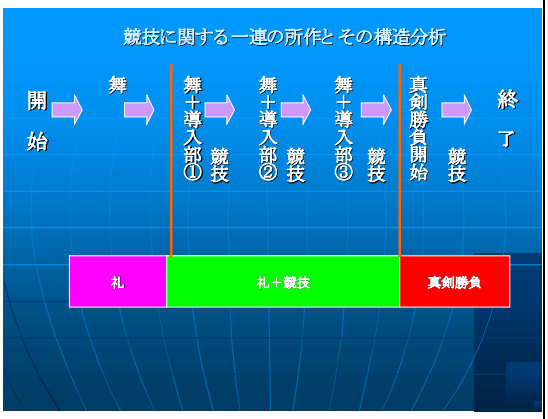


たとえば、上記はナッブート実修者達が共有する身体の急所部位の展開図である。彼らは人体に32箇所（正面22、後背部10）の急所を設定し、この部位を巡り攻防を展開している。彼らはこの部位を巡りさまざまな身体技法を共有しており、またそれらは先述して来たとおり、実修者たちのみに共有されるいわゆる「暗黙知」として、「閉じられた」空間で保持される認識となっている。

このような「暗黙知」としての身体観・身

体技法を言語化し、科学の場に提供することはこれまでのスポーツ科学研究には見られない視座であり、スポーツ・身体研究に新たな知見を提供することである。

またナッブートはさまざまな所作の複合体として存在する。



まず「舞い」に始まるこの競技は、上記表に示されるようにその段階にて対戦相手、および関係者との関係性や敬意のあり方などが示され、またその後は暗黙知として導入部と競技部が並存し、ちょうど日本の相撲の仕切りのように徐々に競技の緊張感、空気が高まっていくようになっているのである。つまり、この競技には、競技の各段階を通じてさまざまに織り込まれたメッセージが存在しており、それらは言葉により発せられ共有される認識とは異なる、身体の示すメッセージとして独特の情報価値を持ち、共有理解されているのである。

ところで、先程も述べたが、本調査地域はUNESCOによる世界遺産に選定された古代遺跡の残る地域であり、エジプト政府としても遺跡保護を積極的に推進している。遺跡周辺の市街地の発達、それによる環境汚染、車の往来の増加など、遺跡群の保護・管理を促進するための施策の必要性が叫ばれる事となり、本研究の対象である聖者祭が行われるコミュニティ住民への移住が義務付けられる事となり、住民たちは政府の用意した新しい居住地へ移動したところである。

周知のように祭礼とは、象徴的なエリアを取り巻く地縁的結合とそれを支える血縁的な結合があいまって支えられるものであり、それらを織り成すコミュニティの地理的・物理的な移動が行われるその移行期に本研究課題が遂行されたことは、動態的な文化研究を行う上で非常に重要な意味を持つといえよう。

たとえば2009年は新たな居住地から、本来の居住地に位置する聖者廟まで約2kmをかけて詣でる形で祭礼が行われることになったが、その距離は物理的な距離以上に、参詣者たち、特にホスト側の準備・運営には大きな影響を及ぼしており、ひとつの信仰の形を巡る大きな変容の可能性を孕み、今後の継続した研究が肝要といえる。

本研究においては、この競技を通して、当該地域の人々が、人間関係の確認・強化・再生産をする事が可能になっていること、またそのプロセスを支える当該地域に根ざしたエスノサイエンスとしての身体観とそれによって醸成された伝統的なスポーツの身体技法が存在することが理解された。

また、あわせて人類共有の財産、観光資源としての文化遺産保護を巡るUNESCOを中心とする一連の世界的ムーブメントの中で生起したコミュニティの集団移住という世界のどこにでもおきうる「日常生活と文化財保護」という命題の中で、本研究では祭りを支える集団としての価値や記憶、聖者祭と構成要素としてのナッブートの関係も大きなインパクトを与えることになった点が理解された。地縁的なコミュニティが解体、崩壊の危機にある現時点において、あらためて心的紐帯としての聖者祭やそこで行われる日常的実践としての伝統的スポーツの持つ価値は、今状況下において新たな役割を期待さ

れる可能性もあり、スポーツ文化の動態を考察するにあたり多くの示唆に富んだ有益な情報を得ることになった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計1 件）

「伝統的格闘技における身体観と身体技法—ナッブートのスポーツ人類学的研究—」
亜洲体育人類学論壇 スポーツ（体育）・人類・文化 論文集 中華人民共和国・清華大学 pp.143-148

〔学会発表〕（計３件）

①「伝統格闘技における身体観と身体技法—ナッブートのスポーツ人類学的研究—」
瀬戸邦弘 亜洲体育人類学論壇 スポーツ（体育）・人類・文化 2009 年 11 月 21 日 中華人民共和国 北京・清華大学

②「エスノサイエンスとしての身体観 ーエジプト・アラブ共和国の事例から ー」
瀬戸邦弘 日本体育学会第 60 回大会 2009 年 8 月 28 日 広島大学

③「観光開発と民族スポーツ-文化遺産保護施策に伴う集団移住と民族スポーツの変容- 」
瀬戸邦弘 日本体育学会第 59 回大会 2008 年 9 月 11 日早稲田大学